

してほしいことを話合いました。私が面白いなど思った内容をキーワード的に書き出します。

働くために「ボランティアに参加しておく」「趣味を作る」「体験実習をする」「得意不得意を知る」「家事を事業所の中でする」「仕事や企業とのマッチング・環境整備」「交通機関の練習」「ガイドヘルパー等で人間関係を練習」「本人の話しを聞く時間を作る」「いろいろな支援機関の輪」「企業の障害の理解」等です。他にも聞きなれない「超短時間雇用」「民泊やスーパーマーケットの経営」「働くことで自尊心、自己肯定感つくる」「作業が本人のイライラをなくすこともある」「石川県の松林の落ち葉の堆肥化→特許取得→伝統野菜、無農薬ニンジンジュースの販売で工賃倍増」「長岡市、特例子会社を呼び寄せた話」「会津若松の障がい者ワークシェアリング」「地域や企業とつながるための後援会や会報の活用で事業所の内容を知ってもらう」「地域と新年会270人、地域の人がビンゴゲームの景品の提供」「施設外就労の活用でユニフォームを揃える」「働く支援と生活支援をセットで」「施設に小学生がボランティア」「地域の祭りに参加、地域に溶け込んだ施設」「企業内での保護者会」「企業の手が届かない家庭の支援」「超短時間雇用を足して障害者雇用率1カウントに出来ないか」「就労継続B型と企業就労のダブルワーク」「ガイドヘルパーと通勤の練習」等、いろいろなアイデアが出ました。

私が印象に残ったのは、本人がありのままに出来る働き方を模索したら、急に職場がスムーズに流れ出したというスーパーマーケット経営の就労継続A型事業所の方の話でした。世の中が多様化しすぎると全部得意にすることが出来ず、誰もが使いやすいユニバーサル化を目指すか、もしくは得意不得意を見極め、仕事内容にマッチングすることが重要になって来たと感じました。

(分科会Bコース「はたらく」の支援)

分科会 Cコース
ほほえみあふれる「高齢期」の支援
東成育成園支部 中島 由紀子



Cコース「ほほえみあふれる『高齢期』の支援」に参加しました。今年も広い会場は超満員で、高齢化問題への関心の高さがうかがえました。

基調講演では上智大学教授大塚晃氏が日本の障がい者福祉の歴史を振り返られ、「高齢化した知的障がい者については入所施設による処遇を重視する傾向があったが、欧米では早くから支援を得て地域で生活することが可能になっており、日本も地域での主体的な生活の確保を推進する方向に向かっている」と話されました。

続いて、親亡き後30年の人生がある知的障がい者の高齢化における様々な変化と支援の在り方、介護保険サービスの円滑な利用について説明がありました。ケアの質が低下しないよう、障害福祉制度及び介護保険制度をコーディネートする相談員とケアマネージャーが早めに連携して移行期を乗り越え、「わくわくドキドキ」を感じられる健やかな老後を送れることを期待したいとおっしゃいました。高齢者と言われる年齢になられた大塚先生が、私達と同じ親の立場で気持ちを込めて話されていたのが印象的でした。

午後の講演は静岡市障害者歯科保健センター所長の服部清氏が「口から始まる健康づくり」をテーマに、知的障がいがある患者の口腔内の状態は看護の質をよく現していることについて事例を報告されました。食事でよく食べこぼすようになった、固いものが噛めなくなりむせることも増えた、滑舌が悪くなった等はオーラルフレイル(老化の始まりを示すサイン)で、歯科疾患を放置することは慢性的な炎症・感染症をひき起こし全身状態に悪影響を与えます。高齢者の高い死亡要因である肺炎は、接食嚥下機能不全による可能性が高いと考えられるとのことでした。

